
SWEET

紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SWEET

【Nコード】

N7433J

【作者名】

紘

【あらすじ】

チョコレートが大好きな幼馴染の遠子とバレンタインコーナーに買い物に来た幼馴染の圭。

天然でふわふわした遠子が嬉しそうにチョコレートを買った物かごに入れていくのを眺めながら、圭はある決意をしてチョコレートを購入したが・・・

バレンタイン、二人の幼馴染の恋模様を描いたほのぼのしたお話。

C a s e K e i (1)

甘い、甘い、チョコレート。

口に含むとゆっくりととろけていく。

S W E E T

「ちょっと、それ全部買うつもり!？」

買い物がごいっぱいに入ったチョコレートを見て怪訝な表情と驚きの言葉を向ける。

遠子の買い物がこの中にはピンク、ホワイト、ブルーなどの色鮮やかな包装紙に包まれた甘いチョコレートが詰まっている。

学校帰りにバレンタインコーナーに立ち寄った遠子は買い物カゴに
プレーンチョコからトリュフ、生チョコ、フォンダンショコラとさ
まざまな種類のチョコレートを次々と放り込んでいく。

「うん、全部買うつもり」

「にしても・・・自分用なんでしょ？」

「どれだけかけて食べていくつもり」

すでに数日といった量ではないそれに視線を向ける。

「ゆっくり一つずつ味わって食べるの・・・春までに」

「4月までに？」

うつとりとした表情の遠子にたいして自分は至極真面目な表情で、

それは大した長期戦だ。それなりの量が必要だ、なんて考える。

そんな私の様子を察してか、遠子がゆっくりと首を横に振った。

「春っていうか、3月14日まで」

・・・カゴの中と遠子の表情を交互に見る。

付き合いが長いせいかな、なるほど何を考えているのかわかってきた。

「・・・で、そこからはホワイトデーのチョコレートを食べてくのか？」

「うん！」

やっぱり。

というか、遠子の頭の中はチョコレートでできているのではないだろうか、と心配すら覚える。

そんな自分の心配もよそにカゴの中のチョコレートは増えていく方だ。

カゴの中に入れたチョコレートに視線を移す。

お母さんと妹へのプレゼント用のチョコレートが2つ。

自分で食べるつもりも、ほかにプレゼントする人もいないのでこの数が正解、だ。

正解、だけれども・・・

（幸せそつにチョコレートを選んでいく遠子を見ていると）

（思わず）

先ほどから手に取るのを悩んでいたチョコレート。

（手が伸びそうになる）

甘い、甘い、チョコレート。

「ねえ、圭ちゃん。どうしてお菓子は甘いのか知ってる？」

知らない。

砂糖が大量に入っているから、とか。

「チョコレートはね、ふふ・・・優しくなれる魔法が掛かっているから」

「・・・遠子、チョコレートを食べすぎ」

「本当だって！」

チョコレートは優しいから甘いの！」

遠子の訴えがあまりに一生懸命で、

（思わず）

「優しくなれる魔法が掛かってるんだ」

（反覆してしまった）

自分を優しい笑顔で見る遠子を見てあながち嘘でもないかもしれない。
いい。

チョコレートばかりを食べている遠子は確かに優しい。

彼女は優しさの塊だ。

甘い、甘い、遠子。

ずっと一緒にいたいと思う。

（それはまるで彼女に依存している）

「あれ、圭ちゃんそれも買っの？」

「うん」

お母さんと妹の分と、

クリーム色の包装紙に赤いリボンが巻かれたチョコレートを買った物カゴの中に入れる。

遠子よりも先にお会計を済ませて、

別々に袋に入れてもらったチョコレートを手には、バレンタインコーナーの近くにあるベンチに座り込んだ。

バレンタインデーまであと九日。

最後にカゴに入れたチョコレートに苦悩することになる。

S
W
E
E
T
・
C
a
s
e
K
e
i

C a s e T o u k o (1)

包みを広げるたびに、甘い香り。

表情を和らげていく。

C a s e T o u k o (1)

ピンク、ホワイト、ブルー。

色とりどりの包装紙に包まれたチョコレートたちを机の上に広げて
しばらくの間眺める。

チョコレートは遠子にとっていつだって甘くて優しい存在だけど、
この時期、その定義にもう一つ加わるものがある。

（特別）

あでやかなラッピングは見ているだけで楽しくなる。

バレンタイン用のチョコレートにはそんな魔法が掛かっているのだ。

（圭ちゃんには言わなかったけれど・・・）

それからおもむろに遠子がかんだのはブルーの包装紙に包まれたチョコレート。

表、裏、表、裏と何度かひっくり返して見て、満足気にそれだけを紙袋に戻す。

そしてピンクの包装紙に包まれたチョコレートを丁寧に開封していく。

少しずつはつきりしていく甘い香りに思わず頬が緩むのがわかる。

（遠子の頬はいつでも緩みっぱなしじゃないか）

圭ちゃん言葉が頭の隅を横ぎるが、仏頂面でチョコレートを見るなんて失礼千万だ。

だとしたら私の頬は緩みっぱなしでも別にかまわない。

包みから解放されたプレーンチョコレートを一粒つかみ、そっと口に運ぶ。

「おいしい〜」

口の中に広がる味は想像していたものよりもずっと優しい味がした。

ほんのりと心が温かくなったような気がする。

それから個別包装されているチョコレートたちをあらかじめシヨップで購入しておいた箱にばらして詰め込んでいく。

ワンサイズ小さい箱にも同じようにチョコレートたちを詰め込んでいき、一息ついて中から摘まんだチョコレートを口の中に放り込んだ。

選んだのはアーモンドチョコレートだったようで、口の中に優しい甘さと、香ばしい香りが広がる。

同じものをもう一つ摘まんで再び口の中に放り込んだ。

「チョコレートにアーモンドを入れた人は天才ね。」

きつと運命の出会いだったのよ」

S
W
E
E
T
(
2
)

C
a
s
e

T
o
u
k
o

Two Walk in Pairs

ふんわりと薫る、甘い香り。

その香りに安心する。

SWEET (3)

昨日買ったあれだけのチョコレートに囲まれると、チョコレートの

香りがその身体にまわりつくらしい。

そのことを実践して教えてくれたのは甘い香りを漂わせて隣を幸せそうに歩いている幼馴染だ。

学校に向かっているはずの遠子のカバンの中には「おやつ」のチョコレートが大量に詰まっていることだろう。想像にたやすい。

「圭ちゃん、圭ちゃん、昨日発見したんだけどね・・・」

昨日食べたチョコレートの中にお気に入りを見つけたようで、いつも以上に幸せそうな笑顔を浮かべている遠子。

（毎回思っけれど、悩みなんてなさそうだ）

（羨ましい・・・）

彼女の幸せ製造思考を一片でも分けてもらえないだろうか、と思っ
ていたら視界の中に小さな箱が飛び込んでくる。

（ん？）

（箱？）

「・・・だから圭ちゃんにおすそわけ」

ああ、なるほど。

はい、と遠子に渡された箱をおとなしく手に取る。

箱は両手にすっぽり収まるサイズのもので、蓋を開けるとやっぱりチョコレートが入っていた。
ところ狭しといったように色々な種類のチョコレートが敷き詰められている。

「たくさんの出会いが詰まった美味しい箱のおすそわけ」

「出会って・・・」

「例えばコレ」

箱の中からゴールドの髪で梱包されたチョコレートを一粒出して僕の手のひらにおいた。

遠子の表情は「食べてみて」と如実に語っていた。

正直なところ朝からチョコレートを口にするのは気が進まなかったが、この幼馴染のがっかりする表情を朝から見るのも御免だった。

カサリ、と包装紙をはいでチョコレートを口の中に放り込む。

（甘い）

チョコレートなのだから当たり前といえは当たり前の味。

早く呑み込んでしまおうと思い切りチョコレートを噛み砕くと、中からどろつとした液状のものが溢れだしてきた。

「これ・・・」

「びっくりした？」

（びっくりしたというか、それ以前に）

「これ・・・お酒・・・」

「そう！ウイスキーボンボン。甘さの中にアルコールのツンとした苦み・・・、美味しいであたしょう？」

例えるならチョコレート界のツンデレか・・・

「ウイスキーはチョコレートのことが好きだけど、素直になれないのよ。でも大好きなの。」

一度意地を張ってしまって、素直になるタイミングを逃しちゃったのよ」

「・・・・・・・・へえ」

頭を抱え込みそうになりながらもなんとか持ちこたえて、遠子の話に相槌を打つ。

近くにすぎたせいだろうか、遠子のチョコレート談議に汚染されてくる。

「ほかにね、初恋の味だったり、切ない失恋の味だったり・・・」

なるほど。

（それで沢山の出会いが詰まった美味しいおすそわけ、か）

遠子が箱に詰めたチョコレートたちの話をうっとりとしながら向かう学校までの道のり。

S W E E T (3) T w o W a l k i n P a i r s

SWEET(4) An Old Tale

そもそも遠子がチョコレートにこだわるようになったのはいつからだったか・・・

遠子のチョコレート談議を聞くようになって随分たつ。

小さいころから遠子にとってチョコレートというお菓子が特別だったわけではなく、確か中学に上がってすぐの頃にチョコレートが彼女の「特別」に昇格したはずだ。

SWEET(4) An Old Tale

中学に上がり、だんだんクラスに落ち着いたくらいの頃。

いわゆる思春期という期間に突入した僕と遠子は些細なことで喧嘩した。

原因は本当に些細なことで、些細過ぎて・・・忘れてしまった。

お互いに意地を張り合い、話もなくなって、他人行儀に互いの名字で呼ぶようになった。

「佐々木さん」

（「トーコちゃん」と呼ばれていた女の子）

「藤堂君」

（「ケイちゃん」と呼ばれていた男の子）

呼び合っているのは13年間一緒に過ごしてきた時間を感じさせないくらい、他人だった。

いつも一緒に登校していた道のりも、時間も忘れ始めていたところに公園にうずくまっている見覚えのある背中があった。

何をしているのかここからでは分からなかったが、長い付き合いで身に付いた感覚が、その背中が助けを求めているように見えた。

（なのに）

以前の僕ならためらいなく踏み出せた一歩が、

（拒絶されることに怯えて）

踏み出せない。

話をしていなかった時間がまるで、深い溝のようになって、二人の間にあるようだった。

こんなに遠子のことが心配なのに……

「どうしたの？」

「……え？」

「具合でも悪い？」と公園の入り口でずっと立っていた僕に話を掛けてきたのは、近くの高校の制服を着たお姉さんだった。

お姉さんは僕の視線の先と僕を交互に見た後、ニマリと笑って、何かを納得したように「ああ」と声を漏らした。

「ちょっとそこで待っててね」

と一言だけ残して、公園の中で今もうずくまっただままの遠子の元に駆け寄っていく。

そして、遠子に何か話した後、公園の外で無様に立っただままの僕に手を振った。

振り返った遠子はとても驚いた顔をしていて、

もちろん僕もすごく驚いていた。そんな僕たちの反応に気付いて切るのかいないのか、お姉さんは大きな声で僕に声をかける。

「その少年、彼女足をくじいたらしいの。すぐ近くに私の家があるからそこまで運んでくれない？」

「え、でも・・・」

しぶって見たものの、結局お姉さんの勢いに押されて遠子をお姉さ

んの家まで運ぶことになった。

お姉さんの家はすぐ近くにあった「美味しい」と近所で評判のケーキ屋さんで、中に入るとすごく甘くていい香りが鼻孔をくすぐる。

「救急箱持ってくるから、遠子ちゃんと一緒に奥に上がって」

有無を言わせない笑顔におとなしく遠子と一緒に奥に上がらせてもらう。

遠子と僕はお姉さん（真理さん、というらしい）がいない間、二人ともどちらかがこのもどかしくなる沈黙を破るかとお互いをうかがっていた。

「お待たせ、少しじつとしててね遠子ちゃん」

と言いながらテキパキと手当てをしていく。

「あ、そうだ、二人ともせっかくうちに来たんだからいいものあげるわ」

遠子の手当てお終えた真理さんがだから少しの間待っていてね、と

言いながら再び席を外した。

店のほうからは時折接客の声や作業の音がしてきた。それからお菓子
の甘い香り。

(・・・・・・お腹すいたな)

その誘われるような甘い香りに、成長期真っ盛りの男子中学生の僕
のお腹は少しずつ空腹を訴えていた。

ぐうう

不意に耳が拾った音は自分のものではない。

だとすれば同じ部屋にいるのは遠子だ。

そっと視線を向けると、顔を真っ赤にしてうつむいている遠子の姿
をとらえた。

聞いたのは僕だけで、今更幼馴染の前でそこまで恥ずかしがる必要
ないのに、と思いながらも遠子がきつと嫌がるだろうと思って聞か
なかったふりをする。

するとそんな空気を打ち砕くかのようにタイミングよく真理さんが部屋の扉を開けた。

「おまたせ！

おなかすいたでしょ？店の残り物で悪いんだけど3人でおやつにしましょ！」

といってお盆に載せていたお菓子を配膳していく。

何種類かの焼き菓子が大きな皿に盛りつけられて、それから湯気の立つ甘い香りのする飲み物を「どうぞ」と渡された。

遠子も僕も「ありがとうございます」と言って渡された飲み物に口をつける。

ココアだと思い口に付けたけれど、これはそれよりもコクがあつてとろけるような甘さを口の中に広げていた。ココアよりも好きかもしれない。

「美味しい！」

どうやら遠子も僕と同じことを思ったらしく、真理さんに「これ何ですか？ココア？」と尋ねていた。

「これはね、チョコレートドリンク。私のお気に入りなの」

「チョコレートドリンクにはね、素直になれる魔法が掛かってるから」

おとなになったら素直になれなくなるの、と続けて口にした真理さんは切なさそうな表情を浮かべていた。

（まるで意地の張り合いが見透かされていたようで）

（僕も遠子も）

（真理さんの言葉に）

ハッとしてお互いの表情を見た。

陽の傾いた帰り道。

足のくじいた遠子を「ちゃんとおくってあげてね」と真理さんにくぎを刺されおぶって歩いていると、「圭ちゃん」と遠子に呼ばれた。

「ごめんね」

「僕も・・・ごめん」

そういえば後にも先にも二人でした喧嘩はこれが初めてだった。

「遠子、けんかした時のこと覚えてる？」

「ホットチョコレート、すっごく美味しかったね！」

そくだ、真理さんの店におよつて帰ろうよ、といいながら僕の腕をぐいぐいと引つ張つていく遠子に苦笑いを浮かべながら『premier amour』の道を急いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7433j/>

SWEET

2010年10月28日06時41分発行